

カサブランカ

中西美子



カサブランカと聞くとハンフリー・ボガートの映画を思い出すでしょう。それに匹敵するほど名高い純白の百合の種類です。原種は、日本の山百合で外国で改良された名品です。この上ないくらいゴージャスな花です。個体差はありますが、香りがむせ返るほど強く、枕元に置いて寝たら死体の気分になること間違いなしでしょう。以前にカサブランカの絵を結婚祝いのプレゼントにと依頼され写生していると、家族が帰宅するたびに「臭い、何の匂いだ」とうるさくて参りました。よく見ると花の中心部に向かって変な突起が出ていてグロテクスです。我が家のように狭い所には不向きでしょうが。はなもちが抜群にいいし、豪華だし広くて風通しがよければ最高にご機嫌な花です。

取材と怪奇



志

村

有

弘

(相模女子大学教授)

私はこれという趣味を持たないけれど、史跡巡りは好きである。そのせいか、一時期、カメラに凝ったことがある。だからといって、高価なカメラが購入できるわけではない。

なるようにしかならないという行き当たりばつたりの生活をしているくせに、小心者であるせいか、縁起を担ぐ性癖もある。夏、織田信長の取材で安土城へ出かけたおり、蜂に刺されてから、一眼レフのペンタックスを使用するのを止めてしまった。滋賀県のある

寺で夢中になって写真を撮っていたとき、うっかりと浅い池の中に落ちてしまった。帰りの新幹線の中で、濡れたスポンじからみつけた藻が、まるで亡者の執念のように思われ、それから、そのカメラを持ち歩いたことがない。

カメラに凝っていたときは、よく中古のカメラ店を覗いて歩いた。変わった型のカメラ、今はフィルムも製造されていないような趣味的なカメラを購入した。(ここまで書いてきて、突然、つげ義春の漫画を思い出した。主人公

が壊れたカメラを修理して売る内容である)そのころは、取材ともなれば、カメラバッグに一眼レフカメラと交換レンズ二本(広角と望遠)ないし三本を持ち、さらにコンパクトカメラを二台くらい携えて出かけたものである。

ところが、そのうちに取材といっても、使用するカメラは一眼レフ一台(それもズームのレンズ一本)にコンパクトカメラ一台があれば事足りるということに悟ったから、急にカメラ熱がなくなってしまった。カメラ屋に足を運ぶこともなくなった。

カメラ熱の消失と共に、一眼レフも携帯するのはなるべく軽い機種を持つようになった。軽い機種に転向したのは、年齢の増加と共に、体力・気力が消滅し、重い物を持つのがいやになったからでもある。

中央大学の渡部芳紀氏(国文学会最大のカメラ愛好者)と会ったとき、カメラバッグの中を見せてもらった。驚いたことに、重量感のある一眼レフ二台と交換レンズ、しかも高級なコンパ

クトカメラを持っていた。渡部さんは私よりも確か年齢が一つ上のはずだが、その元気に驚いた。撮る写真の見事さもプロそのものである。写真の専門家である渡部さんに訊いてみた。「渡部先生、怪奇な場所とか、そういう所で写真を撮ろうとしたら、カメラがいやがって、シャッターを切れないことはありませんか」「ありますよ。どうしてもシャッターが切れない場合がありますね」これで納得した。やはり、そうした場所には人間の目には見えないものが存在していて、何か働きかけているらしい。

としたのだから、壊れても仕方がないのだが、他の二度はいつ、どうして壊れたものか分からなかった。何かにぶつけた記憶もない。そのうちの一つは京都の某神社の境内で気がつく、カメラがいつのまにか割れていた。取材中にカメラが壊れたら、戦場で矢が尽き、刀が折れた武士みたいなものがある。他にコンパクトカメラがあるとはいえ、取材する意欲はまるでなくなってしまう。

許可を得て、墓所に入った。午後四時ころであった。墓所に足を踏み入れた途端、風が吹いたものか、ズラリと並んだ卒塔婆が一斉にカタカタと鳴り出し、まるで私を歓迎してくれているかのように思われ、たいそう感激(?)したので記憶する。

私は、生来、怪奇な場所に心惹かれるものがある。歴史の勝者よりも敗者に心惹かれる。四国の金比羅宮の奥に崇徳院を祀る白峰宮があるが、ここへ行くにはかなりの距離、あまり人が歩かない所を歩いて行くことになる。しかし、どうしても私は行かねば気が済まないのである。

そうしたことが積み積もったものが、最近では、怪奇本の依頼が多い。怪奇本といっても、創作するのではない。主に古典世界の怪奇とか、語り伝えられた近現代の怪奇説話を紹介、編纂する仕事である。

暑い夏、怪奇本を書いているとき、最大の喜びを感じる。

「後世」



志し村むら栄よし守もり
(評論家)

部外者にはわからないことが今、学校とか子供社会の一部で起こっているのか……とぼんやり思っているが、この出来事にはええっと思わせる何かがあった。

義務教育の段階の生徒が自死し、残された文面にこんな意味のことがあったとか、「生まれ変わって云々」。現代の少年が皆、そんな風に考えて生きているのだから、とか、なぜその思慮を生きて活かさなかったのだからとか、現代はこのような少年を生かし、育てるゆとりさえ無い時代なのだからとか、等々。

真の想像力が消えつつある……と一

部で囁かれることもある時代だが、この文面にはその想像力が働いているのが見える。なにつけコトを急ぎ過ぎる時代の風潮とか気質が少年にもあったのかはともかく、心残りな出来事ではある。

小林秀雄に『無常といふ事』というのがあることは、教科書その他でよく知られるところか。だからこの書き出しも、聞き覚えのある名調子と思いつかれる方も多いと思われる。「これは、一言芳談抄のなかにある文で、いい文章だと心に残ったのであるが、先日、比叡山に行き、山王権現の辺りの青葉やら石垣やらを眺めて、ぼんやりと一

ろついてみると、突然、この短文が(中略)心に滲みわたった」。

冒頭で『一言芳談抄』を引用した直後にこう書き、その少し先に小林ならではの表現が顔を出す。「――で蕎麦を喰ってある間も、あやしい思ひがしつづけた」。

普通に、つまり仕事に家事に追われる多忙な日々を送っていたら、こんな表現は出るものではない。青葉を渡る微風に頬を貸しつつ、その内面が捉えていたものとは……と、読む者は、小林が秘めたものへと誘われる。

引用された文章に特別な箇所は無いはずだがと思いつつ、視線はここへ行く。

「其心を人にしひ間はれて云、生死無常の有様を思うに、此世のことはとてもかくても候。なう後世をたすけ給へと申すなり、云々」。

これをよく当り前に読めばこうなる。もはやすべての方途を失った、せめて「後世」はどっにかしたいものだ。と。つまり漂うものは人間の憂愁で、人生を切り拓こうとする積極性とかヴィヴィッドな精神はどこにも見えない、

と。

ところが小林は別様にこの文章と邂逅した。「生きてゐる証拠だけが充滿」と書く時、人は至上の瞬間を経験している自分を意識している——これはほぼ間違いないはずだ。

ここで、この小品と並び鑑賞されることが多いので取り上げるが、この直前に書かれたと見られる『徒然草』にも極めて奇怪なところがある。ちなみに、「言はずに我慢した」のは、こんな場合、小林本人でもあることは言うまでもないようだ。

「これは珍談ではない。徒然なる心がどんなに沢山な事を感じ、どんなに沢山な事を言はずに我慢したか。」

このラストの前に、兼好の『徒然草』第四十段とされる奇妙な一話があることもよく知られる。しかし、これを引用した小林の胸の内が測りかね時は経過する。ところが不思議なことに、見える時には勞せずに見えるものだ。ベルクソンを少し覗き（翻訳で）振り返ると、この小話（第四十段の）こそ、小林の空間の認識を体現しているのだとわかる。と同時に『無常といふ事』

は、同じ人の時間の認識を語ったものだったのだと。

「過去から未来に向つて餉の様に延びた時間という蒼ざめた思想（僕「小林」にはそれは現代に於ける最大の妄想と思はれるが）から逃れる唯一の本当に有効なやり方の様に思へる。」

常識は、過去・現在・未来と並べて、案外それ以上を問題にしないものだ。しかし小林は、「蒼ざめた」という独特の表現でこれを指弾、さらには「妄想」とまで極言している。

ともかく私達の社会生活は、過去から現在そして未来あるいは「後世」と言葉を使う。もちろんこれで何の不都合もない。ところが小林の精通した（と思われる）ベルクソンは、時間を一つの有機体のように不可分と捉える。

すると、頭を記憶で一杯にしてゐるとは知識への偏重とも言えそうで、ややもすると過去という時間を現在に並置（空間化）することになり、「心を虚しくして思ひ出す」という姿勢こそ、過去という時間を真摯に経験することに近く、不可分である未来を輝かしいものとして迎えることにつながるかも

知れない。

そして、問題の「後世」だが、「山王権現の辺りの青葉やら石垣やらを眺めてぼんやりうつろついでゐ」たその時、青葉の木漏れ日の閃光とともに、小林の目の前をあることが走った！人間はなぜ「後世」という発想を定着させて今日に至つたか、その全像が、「後世」を加味することによりこの現在にはより輝き、一瞬一瞬が精気に溢れ、その完璧性ははいよいよ増すと。「あやしい思ひ」とは、それを得た歓喜の小林的表现なのだ。いや、それともこれらのすべてが、小林の文章の背後に明滅する幻影を見ることがなのだろうか……。

さて、昨今は人間から畏敬とか畏れという感性が消えたかのようだ。こんな時こそ、小林が「なま女房」と同じ鎌倉時代の『地獄草紙』の作者の慧眼をこう書くところを思いみるのも必要かも知れない。（『死体写真或は死体について』から）。

「作者はよく承知してゐたのである。人間は地獄に行つても生きてゐる事を。死ねば、鬼がすぐ蘇生させてくれる事を」。

求め、自転車専用レーン



桐原良光

(文芸評論家)

この夏、北欧四方国を駆け足ツアーで回ってきた。雄大なフィヨルドの景観などを存分に楽しんできたが、どの国でも感じたのは、自転車が自転車専用レーンをかなりのスピードで走り回っていて、通勤の男女も、主婦も老人も子供もみんな快適そう、ということであった。実に羨ましい限りであった。

自転車専用レーンは、車道と歩道の間に明確に区分されている。車が入れないわけではないが、誰も侵入してこ

ない。ツアー仲間の日本人は、自転車専用レーンなどにまるで慣れていないから、バスを降りると専用レーンに立ち止まったりしている。現地ガイドが叫ぶ。危ないですよ。「ここは自転車レーンですよ。ここでぶつかって、自転車の人が怪我でもしたら、歩行者が罰金を取られますよ!」

デンマークの首都ストックホルムなどでは通勤者の三分の一が自転車通勤だという。車では渋滞に引っかかってしまつらしい。これで都市部の空気汚

染がどれほど解消されたのかは旅人には分からないが、自転車族が車に切り替えることを想像するだけで恐ろしい。

不明にして、北欧の自転車専用レーンがいつごろから使われてきたのかは知らないが、年季が入っているのは旅人でも分かる。時にヘルメットをかぶり、時にナップザックを背に、颯爽と走り回っている。女性や子供も、右折や左折の合図など片手で慣れたものだ。

ストックホルムには、街中どの専用乗り場でも乗り降り自由の貸し自転車があった。二十デンマーク・クローネというから日本円にして四百円少々のコインを自転車の差込口に入ればキーが解除されて、派手な彩色の自転車を何時間でも乗り回すことができる。用済みとなったら、どこの駐輪場で手放してもOKだ。返却すればコインは戻ってくる。もちろん観光客でも利用できる。自治体が運営しているのか、市民団体がやっているのかは聞き漏らしたが、どこがやっても新鋭戦闘機一機にははるかに及ばないであろうといっ

た規模だ。

パリ市が大規模な貸し自転車事業を始めたというニュースが、今年七月に伝えられた。もちろん車による渋滞を解消して大気汚染を少しでも減らそうという環境対策の一環で、これほど大規模な展開は世界の主要都市では初めてだと毎日新聞にあった。市内七百五十カ所の駐輪場に一万六千台の自転車が置かれており、専用のカードをかざすと自由に乘れるし、どこの駐輪場で返却してもいい。カードは一日用が一ユーロ（約百六十円）で、一週間用が五ユーロ。年間パスは二十九ユーロだ。そつだ、三十分までならカードだけで、次の三十分がさらに一ユーロ、次の三十分が二ユーロと高くなるそつだが、三十分以内で駐輪場を乗り継げば最初のカードだけで済むのだと同紙は伝える。こちらでも観光客OKだ。

振り返ってわが日本国の自転車事情はというと、歩道上での歩行者と自転車の死傷事故が次々と発生して、オサムイ限りだ。自転車専用レーンなど、

滅多にお目にかかれない。交通法規で自転車は車と同じとみなされ、本来は車道を左側通行しなくてはならないのだが、これを守っている人などまづいない。だいたい車道など危なくて自転車で走れやしない。そして左側通行であることが徹底されていないから、左側通行をしているのは、右側通行をしてくるオバサンたちにしよつちゅぶつかりそうになつて急ブレーキで停車することになる。左側通行していて右側通行してくる自転車をどちらに避けたいのか、ぼくは知らない。

子供を前後に乗せた若い母親が向かってくることもある。なぜか女性がよくルール無視で向かつてくる。子供を乗せているのだったら、最低のルールぐらひは守らないと安全は保障されないのではないかと思うが、ぶつかりそうになつても、弱気なぼくは「自転車は左側通行ですよ！」などとは叫べない。せいぜいジロリと相手の顔を見るぐらいだが、にらみ返されるとそのまま立ち去るしかない。せめて自転車を販売

する時に、最低のルールぐらひを記した注意書きを業界で配布するぐらひのことはできないのだろうか。

それにしても日本の道路事情の酷さにはほとほと参る。以前に自転車でちよつと遠乗りした時には、走っていた歩道が立体交差のあたりで突然になくなつてしまったのには本当にびっくりした。止む無く階段を担いで登ったが、これもお役所に文句を言に行けば、「自転車は車輛ですから車道を通行ください」などと慇懃無礼といった対応で終わったのだらう。夏休みに子供たちが自転車による長距離体験旅行に出ているのをテレビで見ることがあるが、歩道のないトンネルなどではうなりを上げたトラックが次々と疾走していく脇を子供たちがトボトボと押して行くのを見ると、この国は何か考え違いしているように思えてならない。

環境立国、美しい国を唱えながら、この国は足元をちゃんと見ていないのではないかという思いが強い。

朝食

佐川 毅彦



この夏、熱中症でたおれる人がいっぱいいる。気温は40度をこえる所もあるようだ。朝から妻は熱心に高校野球を観ている。

私は食事をする。オーブンで昨夜焼いたサバの残りと大豆の水煮をあたためる。炊飯器をあけると少しにおいがする。水つぼくネバついている。器にご飯を盛って、これ大丈夫かしらと妻に聞いた。チラツと見て、これぐらい、どうことない。ウジがわいてなければ上等よ。戦争中はなんでも食ったんだからという。

私は戦後生まれのはずなんだけど。納得できんけど、おなががすいていたので食べることにした。

以前、長沢のヤツがスーパーで買ったハムサンドを食べて、シビレがきて、食中毒をおこして、トイレで動けなくなり、救急車で運ばれたのを思い出してしまった。

不安を感じつつ、恐る恐る全部食べてしまった。

どつやらその日は無事で病院にかかぎ込まれずにすんだ。

心のノートピア 徳沢



新田 啓造 (ジャーナリスト)

冷気迫る針葉樹の林から、ヤマハノノキ、ハルニレ、ダケカンバの広葉樹が目立つ林を過ぎると、ぱっとばかりに視界が開ける。そこにはまばゆいばかりの小さな草原があった。

上高地から梓川に沿って明神池を経て一時間半ほど歩いたところ。突然、目の前に現れた光景は、現実のものとは思えなかった。左手には残雪に光る前穂高岳の岩壁が聳え立っている。梓川の清流に小川が流れこむ。草原

は、まさに楽園だった。ここ徳沢は、明治初期から昭和九年まで牛馬の放牧が行われていたところであるという。

初めて徳沢を訪れたのは、昭和三十年の六月だった。松本から島々電鉄で島々へ行き、そこから徳本峠を越えて徳沢へ入った。

最初の驚きは徳本峠に着いたとき。峠に着いた途端、目の前に現れた明神前穂高岳、岩と雪の世界、まさに神々しいというか、言葉に表現できない感

動だった。この峠は、ガウランドやウエストン、高村光太郎、千恵子も越えたことで知られている。

峠をくだり、梓川沿いに上流に少し歩くと徳沢に出る。白樺の木が点在する草原は、この世のものとは思えない景観だった。世の中にノートピアがあるとすれば、きっとこんなところだろうと、震えるほどだった。

この地で一生、牧童となり過すことができたなら、とあらぬ想像をしてしまう。高校一年の春である。すべてから逃げ出したい気持が、徳沢をより印象的な地として決定させたのかもしれない。その山行が、いまにして思えば、人生を決めてしまった。戻ってすぐ山岳部に入部したのである。

北アルプスの玄関口、松本に育ったとはいえ、山に本格的に登る者は少ない。初めての山行で魂を奪われてしまったのだ。

裏銀座、後ろ立山の縦走、涸沢の合宿、と山岳部の行事が続ぎ、徳沢を通過することもたび重なった。そのつど

徳沢は、最初の印象のまま、やさしく包んでくれた。

当時、朝日新聞に連載されていた井上靖の「氷壁」の主人公が徳沢を通過した日に、徳沢にいたこともあった。

ちなみに、小説「氷壁」の舞台は、徳沢から見える前穂高岳だった。徳沢には徳沢園と村営徳沢ロッジがあり、キャンプ場として指定されていた。

高校を卒業した年の夏、アルバイトで大滝小屋のボツカをした。徳沢から大滝小屋まで毎日、早朝に下り夕方までに荷物を背負い上げる仕事だった。

六、七人で部隊を組んでいた。仕切っていたのは南安曇の山懐、^{まき}牧の人だった。山岳ガイドでもあった。

早朝の徳沢は、また素晴らしかった。朝霧の立ちこめる草原は、幻想的としかいえないようだった。朝露に濡れた草花の輝き、朝陽を浴びてきらめく木々、刻々と変わる大自然の営みにすっかり魅了されてしまった。

ボツカの仕事は楽ではない。当時はヘリコプターはまだ普及しておらず、

山小屋に必要な食糧からプロパンガスまで、すべて人の手で運ばれた。六十kgから百kgを背負って山に登らなければならぬ。背負子の荷は、肩に喰い込む。それをやわらげるために息杖を使う。息杖は丸太棒一本である。

これを使えないとボツカの仕事はつとまらない。隊列は、「一本」と声をかけて休憩をとる。息を整えるところから息杖というのだろう。

楽ではない仕事だったが、早朝の徳沢にひたれるこの仕事は嫌ではなかった。雨の日も風の日も、台風でも来ない限り毎日だった。雨に煙る草原、雨上がりの草原、すべてが素敵だった。

その年の冬、槍ヶ岳の頂上で正月を迎えるべく計画を立てた。肩の小屋まではボツカで何度か行った通い慣れた槍沢登りだった。徳沢は雪に覆われ白い平地は静かに眠っていた。

が、その年、気候が荒れて肩の小屋までがいつぱいで、それ以上は登れなかった。戻りにまた徳沢を通過した。無念の思いも、槍の穂先に立てなかつ

た残念な気持ちもあったが、徳沢は何にも答えてくれなかった。

翌年、松本を後に上京した。牧童への夢も捨てきれなかったが、現実には許されなかった。大学、社会人と忙しい日々が続いた。それでも二十代は年に数回、北アルプスに足を運んだ。徳沢を通過したことも何度があった。

三年前、退職祝いという名目で知り合いに帝國ホテル一泊をとっていた。き妻同伴で久しぶりに出かけた。徳沢まで行ってみようと思った。

季節は六月、夏シーズンの前とあって人影も少なく、爽やかなトレッキングとなった。針葉樹の林は、五十年前とちつとも変わっていなかった。徳沢を目前に、あの時、牧童に憧れた少年の日が思い出された。

それなりに世俗にまみれた人生であった。果たしてどちらがよかったのか。答えは出るものではないが、徳沢に一步足を踏み入れると、そこはやわらかな太陽が差し込む別天地だった。

「短い展覧会の話」

今年は五月中旬から二ヶ月間
ウィーンに滞在。三箇所で開催会を
行い、その中の短い展覧会の話。

ウィーンから約一時間半のところ
にあるチエコとの国境の村ワルケン
シュタインで展覧会をした。村人は
約二〇〇人、良質のワインの産地で
有名だ。展覧会は製薬会社ペーリン
ガー・インゲルハイムのクリエイイ

ターの企画で、プレスハウスで展覧
会が開催され、夜の八時から始まっ
たオープニングはウィーンや近隣の
街からもやってきた大勢の人々で賑
わい、夜遅くまで続いた。事前に新
聞にも紹介されて、当日、メディア
の取材もあった。翌日、会場で行わ
れたワークショップに、一人の少年
がやってきた。日本の伝統芸術の型

さかもと ふさ

(型絵染版画家、エディター
イラストレーター)

絵染版画に関心を示してくれて、後
日、ウィーンのギャラリーでした展
覧会にも見に来てくれた。ワーク
ショップも体験していった。

日本の文化に触れられたことに感
謝の意を述べていき、村でも評判の
頭のいい素直な少年であった。



星になって



永岡 慶之助 (作家)

その新聞のコラムを一瞥した瞬間、私は思わず「凄い！」と唸ったものだ。『ロックスター「星の博士」を指す』と活字も大きく、英国の著名なロックバンド「クイーン」のギタリスト、ブライアン・メイさん六〇歳が、出身大学に天文学の博士論文を呈出したと報じていたのである。

どつしても諦めきれず、三六年ぶりに当時の研究をまとめたというのだが、スペイン領カナリア諸島の天文台で、三・六メートル級の大望遠鏡を使って、「何度も頭をかきむしりながら」論文を完成させたという。苦心の論文のタイトルは「黄道のちり雲における視線速度」だそう。私などにはチンプンカンプン、とんと理解のいかぬ、深遠な宇宙の研究のようだが、博士号が授与されるかどうかは、提出論文に関する口頭試問の結果によるとのこと。恐らく、この原稿が活字になる頃には、ロックスター「星の博士」が誕生しているのではあるまいか。いや、きっと誕生しているに違いない。

ところで、「星の博士」から連想されるのは、やはり『星の王子さま』だ。これはフランスの作家サンテグジュペリが、第二次大戦中に米国で出版以来、販売部数八千万部を超えるという世界的なベストセラーである。原題は『プチ・プランス』だから、「小さな王子さま」というところか。「星の」文字は冠してない。これを『星の王子さま』と訳したのは、仏文字者の故内藤瀧氏であった。原作の著作権が切れて以来、「原作にもっとも近い」とか「原作に迫る」と銘うたれた新訳本が、次々と出版されたものの、いずれも『星の王子さま』を謳っているのは興味深い。ところで私は、自身飛行機乗りだったサンテグジュペリの作品の一つ、堀

口大学訳「南方郵便機」の、「水のように澄んだ空が星を漬し、星を現像してしていた。しばらくすると夜が来た」という文章を好むものだが、原作者は一九四四年、偵察機でコルシカ島を飛び立ち、それなり消息を断った。星になつたか!?

星に魅せられたのは、なにもサンテグジュペリやロックスターばかりではない。平安末期、高倉天皇の中宮建礼門院に仕えた右京大夫なる女性もまた、その一人に加えずばなるまい。私家集『健礼門院右京大夫集』には、死別した恋人、平家の公達平資盛との追憶のおもいが綴られており、その詞書の長いことでは知られているが、真冬の夜空に星を眺めた文章が美しく見事なのである。

彼女は文治二年の冬、比叡山麓坂本の宿に旅して、夜空を眺めた所感を、「二月ついたちころなりしならん。夜に入りて、あめと雪ともなくつちちりて」と書き出し、

「空を見上げたれば、ことに晴れて、

浅黄色なるに、ひかりこととしき星の大きなる、むらなく出でたる、なめならずおもしるくて、縹の紙に、箔をうちちらしたるによう似たり。今宵はじめて見染めたる心地す……」

そして最後を、
「月をこそ眺め 馴れしか
星の夜の 深きあはれを
今宵知りぬる」
と結んでいる。

この彼女の文章を新村出博士は、国文学史上の絶唱と評価されており、更に興味深いのは、昭和の天文学者が精緻な計算によって、彼女が眺めたのは、乙女座の木星と土星であつたと証明されたことである。遠くはるかなる往昔の想つ女人が厳しい冬空に仰ぎみたる星と、現代天文学者の結びつき 溜息がでるほど興味が尽きないですなア。

さて、真冬の右京大夫とは全く逆に、私は真夏、屋久島の平内海中温泉で、仰ぎみた天の川の素晴らしい景観は、終世忘れえないと思う。その日の入浴可能は、潮の満干の関係から、夜中十時

半頃からだつた。

青い闇の奥から、潮騒いと強い磯の香がして、そこかしこに話し声が聞え、そろそろと岩壺に身をすべらせると、ざぶりと波が踊り込み、ほどよい湯加減なのであつた。岩に首をもたらせて天を上げば、天心から水平線へかけ白い大銀河のながれ。日中ならばトカラ列島まで遠望できたことだろう。

思えば、亡妻も星に魅せられた一人であつた。夜毎『ニコウトン』誌別冊『星座物語』の美麗なグラビアに見入り、思いを天空のロマンに遊ばせていたものである。本気でドーム付きの天体望遠鏡を欲しがつたが、ついにその希望は実現しなかつた。近頃「千の風になつて」という歌が流行っているようだが、わが亡妻は、恐らく星になつたに違いない、と私は信じている。

妻のひとり言



山本千明

(ECC英会話講師)

NHK朝の連続ドラマでお決まりの場面があった。主人公の女性と夫が深夜お酒を酌交しながらとめどない話をしている。時に笑い時に泣き喧嘩腰になることもありながら、注しつ注されつ会話は弾む。私の周りの女友達は皆この二人の様子を「理想的夫婦像よね。」と評して遠い目をする。彼女達の視線の先にはこうはいかない現実が存在しているようだ。我家として例外にあらず。数年前のとある夏の朝。夫が仕事に出かけようとしてふと庭に目をやりこ

のたまわれた。「キュウリやトマトが元氣ないぞ。水やつとけよ。」無防備に地雷を踏んだ瞬間である。私は呟く、「...いいわねえ。キュウリやトマトさんは。」「何故に?」と言いたげな夫の表情を知り目に大きな独言つは続く。「寂しさに枯れかけていても気にも留めてもらえない。かわいそうなナスと妻。キュウリやトマトが羨ましい。」結婚生活十四年。「年休五日制ですか?」と思つ程仕事に追われる夫には妻の顔色を見る余裕も乏しく基本的に立って動いて

いれば大丈夫と認識されているようだった。夫婦の会話らしきものは一日平均十分程度。深夜の夕飯を済ませれば倒れこむように眠るのがほぼ毎日のリズムであった。心優しき寛大な妻は、それでも夫の居ぬ間に遊び惚けることもたまにしかせず、ひたすら夫の体を心配しつつ不平不満を押し殺していたのである。さすがにこの時は心配する方角もしくは順番が間違つていませんか」と進言申し上げた。夫の名誉の為に補足すれば、根はとても優しい人である。こんな妻にも「ありがとう。」が言えるあっぱれな人格者であり誰に対しても公平無私な紳士でもある。ただ一つ。女性には楽しき会話という「水やり」が必要だということが今一つか今三つくらいご理解いただけていない様子。どうも世の殿方は夫も含めて「察する」ということが不得手らしい。妻達は変色したりしないので目に見えないから気がつきもしない。植物が萎れてきたら水が足りないと分かるだろうが妻が急に元気がなくなったり無愛想

になっても原因がわからず適切な対応もできない。あの朝ドラの夫婦の会話の中には常に妻の様子に目を配り小さな変化も見逃さない夫の温かさがベースにあった。「女の気持ちは分からん！」と困惑しながらも絶えず相手の杯にお酒を満たしながらそこに映る表情を見抜く力があつた。男には「言っても分からない。」と諦め顔の妻は多い。ただ、「言わなきゃもつと分からない。」とは思つ。あの日から私は学習をした。枯れかけた時は遠慮なくアビールをするしかない。「ただ今水が不足のため貯水率三十%になっております。」その報告を受けて夫はお酒と肴を手に食卓につく。「お疲れさま。」と微笑み合つて注しつ注されつ一日の出来事など語り合う。あら、いい雰囲気。ただしこの辺りで夫の疲れはピークに達し、せつかくの会話も黙と共に絶えてしまう。正味二十分。ゆるゆるとあの夫婦のように語り合える日はあと十年、定年の日を待つしかないかと苦笑する。その歳になってもお互いお酒を美味と感じ

られる体であることを祈りつつ夫に布団を掛ける毎日である。



香りに囲まれて



にし ざわ ち より
西澤千典
(「三田文学」編集委員、
JSA認定ワインエキスパート)

「嗅ぐ」ことが好きなのかもしれない、と気づいたのはわりに最近で、ここ数年のことである。それまではむしろ嗅覚は鈍い方で、他の人が気づく匂いにも気がつかなかったりした。それが、三年前からワインの勉強をはじめ、資格を取るべく真剣にワインの香りを取る練習をしたことから急に敏感になり、世の中にあふれる匂い・香りに興味湧きはじめた。嗅覚も訓練次第で

鍛えられる、といつことをはじめて知った。
ワインの世界では、例えばフルーツ香のごく一部だけでも柑橘、りんご、桃、パイナップル、さくらんぼ、いちご、カシスなどがあるし、花の香りがすればその中でも薔薇、すみれ、百合などのように、できる限りの香りを嗅ぎ分けることが要求される。スパイスやハーブもあるし、変わったところで

はなめし革、火打石、腐葉土などの表現もある。「葡萄酒」なのに、「葡萄酒の香りです」などとワインスクールで発言したりすると「そんな表現では駄目です」と注意される(マスカットから作るワインだけは、本来の品種が持つ香りが強く出るので「マスカットの香り」と言っても許されるが)。また、傷んでいるなどの理由で明らかに不快な匂いがする時以外は「匂い」ではなく「香り」と表現しなければならぬ。そんな練習を続けているうちに、自然鼻が鍛えられ、同時に香りの持つ力の大きさや魅力を考えるきっかけもなった。
が、生まれついて敏感ならともかく、「香り道」初心者の私の周りが、急に匂いであふれ出したのは驚いた。いい香りなら構わないが、不快な匂いも感じ取れてしまう。満員電車でも、人との密着度や暑苦しさ以上に、様々な匂いにまいつてしまつこともある。元々敏感な人は、私が何も気づいていなかった間にも、周囲のこんな匂いを嗅ぎ続

けてきたのかと驚いてしまう。多彩な世界を感じ取れるのはいいが、一長一短である。

ところで、誰にとっても快い香りは存在するだろうが、自分や一部の人だけに良いと感じる香りもある。私にとっては、マッチの火を消したあと、新しい辞書、靴箱や革靴を多く並べた靴屋、ペンキやインク（要するにシンナーの匂いだが、鼻で嗅ぐのが好きなので、口から吸引することは興味がないので、念のため）などがたまらない。アロマポットの蠟燭を点ける時は必ずマッチを使う。アロマの香りを嗅ぎたいのがマッチを堪能したいのかわからないくらいである。新しい辞書を開くと思わず顔ごと鼻をつっこみたくなる。靴屋では深呼吸。ただ、口で吸ってしまったのは何にもならないので、鼻だけを使う。ペンキ塗りの建物の近くではゆっくり歩く。そんな私を「変だ」という人が大多数だが、たまに同意してくれる人に出会って、ひとしきり他にどんな匂いが好きかを語り合い、盛り

上がる。

「昔の人の袖の香ぞする」と古今集にはあるが、確かに嗅覚は思い出を一番急速に呼びさまし、プリミティブな感動を起こさせる。また、嗅覚は歳をとっても一番衰えない五感だとも聞いたことがある。そつだとすれば、鼻の楽しみを今のうちに沢山身につけておけば、どんな歳になっても、目が見えづらくなったり耳が遠くなったりしても楽しめる。そう考えると俄然面白くなってきて、新しい香りに巡りあうのが今の喜びである。ワインは飲む前に香りを取ることに夢中になり、つい飲むのを忘れるくらいの時もある。海外に行ってお土産を買う時も、もっぱらアロマグッズだったり、いい香りのお風呂グッズだったりする。銀座や鎌倉で、和の香りを扱う店を見つけるとふらふらと吸い寄せられる。つける香水や部屋に焚くアロマを、日の気分によって変える。そんな、ささやかだが心躍る楽しみに日々満たされている。

